



新春対談

中家徹

JA全中会長

×

荒川静香

プロフィギュアスケーター

安全・安心な農畜産物の安定供給へ

日本農業を次世代に

フィギュアスケートのトリノ冬季五輪金メダリストで、食や農業への関心が高い荒川静香さん。子育てや東日本大震災の被災地の取材経験をもとに、安全・安心な農畜産物を供給する日本の農業をどのように守りつないでいくか、JA全中の中家徹会長と対談しました。

良質な食材と食事が アスリートの体を支える

中家 荒川さんは、フィギュアスケートで世界を舞台に戦い、さまざまな功績を残されています。しなやかで強^{きょうじん}靱な体をつくり、ベストな体調を維持しなければならなかったかと思うのですが、食事にも随分気を使われてき

たのではないのでしょうか。

荒川 フィギュアスケートは5歳から始めましたが、現役選手時代に大けがも大病もなく、風邪ですらひいたことはありませんでした。それは幼少期から、両親が「食」を大切に育ててくれたおかげだと思っています。好き嫌いせずバランスよく食べられるようメニューを工夫したり、食べ残しがないように

「好きじゃないものを先に食べなさい」と話し掛けたりしていました。アスリートの“体づくり”というのは、大人になってから始めるのでは遅く、子どものうちから取り組まなければなりません。

中家 なるほど。荒川さんは海外を転戦することも多かったと思うのですが、どのようなものを食べていましたか。

荒川 私が現役のころは五輪のような規模の大会でも、日本食を取るためのサポート体制が整っていませんでした。ですから、現地のもを自分で選んで食べるしかありませんでした。体調を崩す選手もいましたが、幸い私は大丈夫でした。自分に必要な食事の取り方や食材について、自分で考え知識を深めることができ、振り返ってみれば自分のためになったと感じています。食について考えることは、アスリートに限らず、全ての消費者にとって非常に大事なことではないでしょうか。

中家 そうですね。私は中学・高校とずっとバレーボールをしていて、体を大きくするため何でも食べていました。もっとも、現在に比べれば豊富に食材がある時代ではなく、えり好みする余地もありませんでしたが。家では「茶わんにご飯を1粒も残すな!」と、徹底的に言われていました。おかげで好き嫌いはなく丈夫に育ちました。健康面では今も特に問題はありません。

安全・安心な国産農畜産物を 子どもたちに届け続けたい

中家 荒川さんはアイスショーの出演や講演活動などでお忙しいと思うのですが、2人のお子さんの食事は、誰がどのように作っているのでしょうか。

荒川 私が毎日3食作るようにしていますが、時間との闘いですね。それと、子どもはたくさんのおかずを並べても、同じものばかり食べてしまうもの。ですから、1つの料理にたくさんのおかずを使うように意識しています。

例えば、お好み焼きに十何種類の野菜を刻んで入れて、食べられたら種明かしをします。「ピーマンも食べられたじゃない!」という感じですね。ハンバーグも必ず何種類かの野菜を入れますね。苦手なものでも食べられたことで子どもの自信につながります。食べられる喜び、楽しみを意識できるようにしています。

中家 レトルト食品を頻繁に使うご家庭も少なくないでしょう。でも、生の食材に手を加えて料理を作ること大事だと思うし、それ自体が教育だと思います。仕事をしながら3食作っているのはすごいですね。

荒川 私も子どもには、調理される前の素材がどんなものなのか、しっかり教えていきたいと思っています。食事は脳の発達にも大きく関わりますし、栄養が足りなければ集中力

なかや・とおる

1949年和歌山県生まれ。2004年J A 紀南組合長。2012年J A 和歌山中央会・各連共通会長。2012年J A 全中理事。2013年J A 紀南会長。2017年8月から現職。

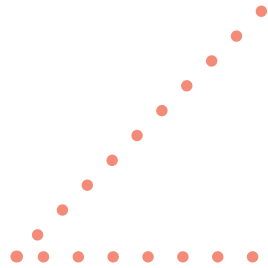
あらかわ・しずか

1981年東京都生まれ。幼少時代は仙台で過ごす。プリンスホテル所属。1998年、長野五輪へ出場、2006年のトリノ五輪では金メダルを獲得。2006年5月にプロ宣言。2013年一般男性と入籍、2014年に第1子、2018年に第2子を出産。現在は育児と並行して日本スケート連盟副会長を務めるほか、テレビやイベント出演、スケート解説など活躍中。





食料自給率は国民全体で 考えるべき問題です (中家)



の欠如にもつながります。それと、子どもが通常の食事を取れるようになってからは、産地を意識するようになりましたね。やはり、国産と書いてあると安心して手にすることができます。

中家 ここ何年かで消費者の皆さんが食の安全・安心に対して、非常に関心を持つようになりましたね。JAグループとしては、そんな消費者の思いに応えるためにも、生産履歴の記帳や残留農薬の分析などに取り組んでいます。農業生産工程管理（GAP）を取得しているJAもあります。

荒川 東日本大震災の被災地を巡る週刊誌の企画で、復興を目指す農家の方々取材させていただきました。農作物が私たちのもとに届くまで、どのような工夫をしているのか、どれほどの厳しい検査を通過しているのかを知ることができました。不安を抱えながらも粘り強く苦難を乗り越え、農業に真摯しんしに向き合い、農畜産物を大事に育てられている姿が印象的

で、自然と感謝の念が湧き、「国産を子どもに食べさせたい」という気持ちになりました。

中家 安全・安心な農畜産物を安定的に供給する、これがJAグループの最大の使命です。肥料や農薬の使い方を間違えれば出荷できなくなりますし、消費者の信頼は崩れてしまいますので、生産現場は各段階で細心の注意を払っています。国産を多くの消費者に食べていただきたいですね。

荒川 被災地では、まだまだご苦労されている方がたくさんいます。被災地の現実と復興への取り組みを多くの方に知っていただきたい。被災地の方を招待するアイスショーに出演したこともあります。これからも私なりの形で応援し続けていきたいと思えます。

中家 私も被災地を訪れましたが、原子力発電所事故の影響で放置された水田に、木が茂っているのを見て、同じ農家としてまさに涙が出る思いでした。「これが水田だったのか」と。去年は、各地で深刻な自然災害に見舞われました。

愛媛県では、豪雨でミカン畑が押しつぶされ、復興の見通しが立たない状況に、離農せざるを得ないと思っている方もいるようでした。どの農家にも何とか前向きに頑張っていたいただきたいですし、「もう一度、農業をやろう」という気持ちを持てるように、JAグループ

食と農に触れる機会を増やすことが、農業の理解者を増やします（荒川）

は支援を続けなければなりません。



中家 日本の食料自給率はカロリーベースで38%と、先進国では最低の水準です。2017年、スイスでは国民投票で約80%の賛成を得て、憲法の中に食料安全保障が書き込まれました。スイスの食料自給率は50%です。日本よりは高いのですが、国民の大きな関心事であることがうかがえます。

一方、日本は農家の平均年齢が67歳。年々生産基盤が弱くなっており、担い手不足も顕著になっているのが現状です。食料自給率については、農業者だけの問題ではなく、国民全体で考えるべき問題だと思っています。

荒川 やはり中家会長がおっしゃるように、食料自給率や食に関する問題は広く国民に提起して、みんなで考える機会があってもいいと思います。そうすることで一人一人の意識が高まり、職業として農業を選択しようとする若者を増やすことにつながっていくのではないのでしょうか。

中家 これまでは親から子へ農家を継いでいくというのが当たり前でした。しかし、農家の平均年齢を見ても分かるように、新規就農者をもっと増やしていかなければなりません。

荒川 「食料はスーパーに行けば手に入る」と、多くの方は漠然と思っているのではない



でしょうか。私も以前よりは農業に詳しくなりましたが、都会に住んでいると、食材はスーパーに並んでいる姿しかイメージできないのかもしれないかもしれません。産地からスーパーに届くまでの工程も、ほとんど知られていないのは問題だと感じます。

中家 消費者と産地の距離が離れすぎたのでしよう。子どもが4本足のニワトリの絵を描いたり、魚の「アジ」を描こうとすると“開き”になった絵を描いたり、冗談のような話も聞きます。産地とは違う姿で届いているのだから、仕方がないのかもしれない。だからこそ、食農教育が重要であり、子どもたちに食や農業に関心を持ってもらえるような活動を、JAグループは進めていかなければなりません。

荒川 家庭菜園や市民農園など、子どものうちから、誰でも気軽に農業に触れられる環境があるといいですね。JAグループの皆さんには、食農教育の取り組みを頑張って続けていただきたいと思います。